



10周年式典で行われた香港特別行政区旗と中国国旗の掲揚式（写真提供：香港特別行政区政府）

香港返還10周年

香港が英国から中国に返還され、特別行政区となつてから7月1日で10周年を迎えました。この日、香港会議展覧センターでは記念式典が、また、目抜き通りではデモ行進が繰り広げられ、多くの香港市民がこの10年を総括するように、様々な意思表示を行いました。胡錦濤・中国国家主席は、香港と中国の経済緊密化を称え、一国二制度については「完全に正しいことが証明された」と語りました。その一方で「一国が二制度の前提であり、一国なくして二制度はない」と急速な民主化の動きをけん制しました。

一方で、民主派団体が主催した市民デモへは68,000人（主催者側発表）と予想以上に多数の人々が参加しました。元政務長官で強い人気を持つ陳方安生（アンソン・チャン）さんや立法会議員の李柱銘（マーティン・リー）氏、さる3月の行政長官選挙を現職の曾蔭権氏と争った梁家傑（アラン・リョン）氏らも加わり、直接選挙の早期実現を求める「我要普選」のスローガンを掲げて行進しました。

Hong Kongから香港への10年。その歩みを気象に例えれば「前半雨、中盤どしゃぶり、終盤晴れ」といえるかもしれません。1997年の返還直後に起きたアジア通貨危機と鳥インフルエンザ。返還フィーバーは急速に冷めました。

そして2003年、中国を発症源とする新型肺炎SARS（重症急性呼吸器症候群）が香港を奈落の底に突き落としました。世界の感染者数は8000人超、香港内の累計感染者は1755人、犠牲者は296人に達しました。海外からの観光客も投資のおカネも止まりました。町並みからは一時、ネオンサインや高級ホテルの灯までが消えました。政治の民主化も遅れ、03年の返還記念日には50万人の市民が街に繰り出し、デモ行進を行いました。しかし、このとき調印された中国との経済緊密化協定（CEPA）が契機となり、翌04年からの香港は本土とのヒト、モノ、カネの交流を加速、年率6%を超える経済成長を続けています。

香港の将来はどうなるのでしょうか？香港基本法は一国二制度の下、市民に「言論、報道の自由、結社、集会、デモの自由」を保証しています。行政長官も立法会議員も「最終的には普通選挙で選出される」ことをうたっています。しかし、返還式典の直前、香港空港内で法輪功関係者が多数の入境処職員から強制的に排除されました。ある銀行が返還デモに参加しないのを条件に100HKドルを与える「デモ妨害工作」をしていたとも報道されました。香港はこうした動きとどう向き合うのか、自由と人権を維持し、普通選挙の実現へ道を開けるのか。今後10年の香港の動きを世界が注視しています。

広報委員・麻生 雅一郎

目 次

2007年8月発行

香港返還10周年	1
香港特別行政区設立10周年を祝して	2・3・4
香港返還10周年記念イベント	4
日本香港協会初代理事長 故伊東正身さんを偲んで	5
香港新時代	6
「どうして今、広東語？」	7
支部便り 関西	
「第5期を迎えたCMMS」	8
「女優 三林京子氏を囲む会」(文化部主催)	9
支部便り 中京	
香港ビジネスセミナー開催報告(東海東京証券との共催)	10

支部便り 福岡	
福岡の自動車産業など	11
支部便り 山形	
香港での暮らしを楽しむ	12
香港便り 設立40周年を迎えた香港柔道館	12
支部便り 北海道	
第16回YOSAKOIソーラン祭りのご紹介	13
支部便り 宮城	
「設立記念セミナー・祝賀会」など	14
「初の表彰台!ドラゴンボートレース・香港カップ」	15
ザ・ペニンシュラホテルズからのお知らせ	16

香港特別行政区設立10周年を祝して

日本香港協会 名誉会員 折田 正樹

(中央大学法学部教授; (社)国際情勢研究会会長)

1. 本年7月1日は、1997年に香港が英国より中国に返還され、特別行政区として新たに誕生した歴史的な日から十年目である。香港のこの十年の歩みには多くの困難があったと考えるが、それらを見事に乗り越え、香港が輝きを増していることについて、心より祝意を述べたい。丁度十年前の春、香港返還の直前に、筆者は日本香港協会「香港返還おめでとう!」と題して講演を行い、香港の将来については、強靱性と柔軟性のある香港であるので、困難があってもしたたかに生きるであろうから、慎重ながらも楽観的であると述べた(飛龍1997年春号)。返還前の92年から94年にかけて二年間、総領事として香港に勤務し、当時行われていた香港をめぐる中英交渉を近くで観察しながら、香港が将来どのようなところになるかを色々と考え、香港の友人達とも大いに議論したことを昨日のように覚えている。香港を離れてからも、香港のことについては、関心を持ち続けて来た。歴史の流れの中で、中国の特別行政区として新たに出発した香港が、その後も香港らしさを失わず、大きな成果をあげていることを香港の友人としてとても嬉しく思う。そして、改めて「10周年おめでとう」と言いたい。

2. 香港から日本へ戻り、東京で勤務していた間には、香港を数度訪問する機会があったが、丁度97年7月1日の新生香港誕生のその当日にデンマークの大使に任命された後は、デンマーク、リトアニア、英国の大使として欧州の勤務が続いた結果、香港を訪問する機会はなかった。しかし、その間も、香港の友人達との連絡は絶えることなく続き、また、欧州まで訪ねて来てくれる友人も多数いて、香港のそれぞれ時点における状況については詳しく教えてもらった。英国での勤務を終え、日本に帰国した後の昨年11月に、約10年振り、新香港発足後初めて香港を訪問することが出来た。到着してまず感じたのは香港を訪問するたびに感じる何とも言いがたい香港が発出するエネルギーであり、香港に戻って来たのだと感慨を覚えた。滞在中、列車、地下鉄の中、散策中の町の中、友人達と話をすることで強く感じたこのエネルギーは、香港島のスター・フェリーの波止場から半径数キロ以内に政界、経済界、マスコミ関係の要人だけでなく、多数の一般人が住み、絶えず変化を伴う新しい動きが凝縮して見られるためであろうか。今回の訪問は、三泊四日の短い旅行で、土日にかかっていたため、多くの友人達と再会するのは、とても無理ではないかと考えていたが、旅行が終わって見ると、結局、到着の日の晩に妻と二人でセントラルを散策し、行列をなし賑やかそのものの舗記酒家で鳶鳥のロースト等広東料理と雰囲気満喫したあとは、一度の朝食以外、朝、昼、晩すべての食事は、香港の友人達との会食であった。パシフィック・プレイスのホテルに泊まったが、ホテルのエレベーターの中で、十年振りがある友人にばったりと鉢合わせをし、そのためにその友人のグループと急遽会食がアレンジされることにもなった。

香港在勤時代には、一週間の朝、昼、晩の食事がすべて会食だったことが良くあったが、その時代を思い出す四日間であり、そして香港の皆から、集中的に現在の香港の状況についての講義を受けた。

3. 新香港になってから完成した香港国際空港は初めてであった。開港直後に問題が生じたこともあったと聞いたが、現在では、24時間稼働のこの空港は、世界各国の空港を経験した筆者からみて、世界で最も機能的で、便利な国際空港ではないかと思う。重い荷物を引きずっていても、階段の上がり下りはなく、航空機を出てから、「歩く歩道」を使い、同一平面上にエアポート・エクスプレスの機場駅まで到達出来、駅でほとんど待つことなく、列車に乗ることが出来る。列車に乗れば24分でセントラルの香港駅に到着。帰りにはセントラルでチェックインをすれば、その後、実際に航空機に搭乗するまで、荷物なしの行動が楽しめる。空港のあるランタウ島の開発はめざましく、多くの新しい開発地域に立つ新しい住居、商業ビルに目を眩した。筆者が香港在勤中に起工式に出席する機会があった島と半島を結ぶチンイ橋も見事に完成していた。かつて、チャリティ・ウォークに参加したことのあるランタオ・トレイルは健在であると聞いたが、ランタウ島の山の中で、じっと世の動きを見守っておられる寶蓮寺の「天壇大仏」様も島の変化にさぞ感心しておられることであろうと思った。

4. 時間的な余裕はなかったが、それでも、ホテルからショッピング・センター、建物と建物を結ぶ廊下をずっと歩き、外へ出ることなく、セントラルに到着。クウィーンズ・ロードを経て、ミッド・レベル・エスカレーターに乗り、ハリウッド・ロードを歩き、香港島の守り本尊とも言うべき「文武廟」にお参りし、ご無沙汰のお詫びと訪問のご挨拶をした。また、山頂公園までは行けなかったが、ピークのマウント・オースティン・ロードの途中の展望台から香港、九龍半島の展望をし、ピークトラムにも久しぶりに乗り、ジェット・コースター並みの急勾配から斜めに傾いたようにも見える高層ビルの景色も楽しむことが出来た。埋め立てで若干狭くなったビクトリア湾をスター・フェリーで半島側に渡り、海濱プロムナードも散策。海と山とさまざまな趣の摩天楼の細長い高層ビル群、庶民のアパート群が一体となって醸し出す香港の風景は世界に例を見ない美しいものであるが、セントラル等の開発が大きく進み、多くの新たな高層ビルが建ったこと、庶民のアパートの多くが近代的ビルに建て替えられていたことは印象的であった。また、近代的なビルに挟まれるようにして、かつて良く訪ねたセントラルの細い利源東西街等の両側に密集して並ぶ多くの店が健在であったのは、嬉しかった。また、キャット・ストリートでは家具等の骨董品、中古品とともに赤い小型の毛沢東語録や文革時代に中国で学生が被っていた帽子が、ジャッキー・チェンなど映画スターの写真満載の古雑誌ともに店に並んでいるのを見ていかにも香港らしいと思った。香港の中を回ってみて感じたのは、広東語の世界の中になんか北京語が浸透していることである。中国から大量の本土人が旅行で訪問するだけでな

く、初等教育においても北京語の学習が重視されて来ている。香港が中国に戻った以上は、香港人であるとともに中国人であるとの意識が強くなって来るのは当然のことであろう。相対的に香港人の英語の能力が落ちるのではないかと懸念する人もいるが、世界の中の大きな経済センターである香港にとって、英語でビジネスが出来るところと言う強みは維持していかなければならないとの意識も強いように感じた。中国からの訪問客も目立ったが、その反面、多くの欧米人が、乳母車を押しながら家族連れで、全く自由な感じで、スター・フェリー、ピーク・トラムを楽しんでいる様子、公園の中でフィリピン人のお手伝いさんがグループをなしているのを見ると、香港の国際性は日本の諸都市と比して遥かに進んでいるように思えた。

5. さて、観光はここまでにして、香港の現在の経済状況を見てみよう。世界の経済統計の多くは、香港を中国本土と別記している。人口は約7百万と小さいが、経済の大きさをGDPで見ると、アジアの中では、日本、中国、インド、韓国、インドネシアに次いで第6位か第7位の大きさであり、タイとほぼ並んでいる。マレーシア、シンガポール、フィリピンよりは大きい。一人当たりのGDPは、日本に次いで第2位となっている。また、外貨準備高は、世界で、中国、日本、台湾、韓国、ロシア、インドに次いで第7位である。また、国別統計からはなかなかわからないが、多くの香港企業が、指令本部を香港に置いて、大半の事業活動を、香港外の中国等で行っていることも注目すべきである。これらの企業の事業規模は、相当大きなものと考えられる。一説によれば、広東省だけでも、香港企業は香港の全人口にも匹敵する約6百万人もの労働者を雇用しているという。日本においては、中国本土の急速な発展に目を奪われている感があって、香港の経済状況については、新聞等マスコミの報道もまた経済界の人々も、見落とし勝ちのように思われ、新香港発足十周年の機会に香港に大きく焦点を当てても良いのではないかと考える。

6. 香港経済の将来を見通すに当たって注目すべきは香港の国際競争力に関する最近の調査結果である。スイスの有力なビジネス・スクール国際経営開発研究所では、毎年世界各国地域の「マクロ経済」「政府の効率性」「ビジネスの効率性」「インフラ」の四分野について多くの統計を集計し、調査を行い、各国地域の競争力に順位を付けているが、去る3月の発表では、香港は米国、シンガポールに次いで第3位となっている(06年と05年においては米国について第2位。なお、本年、日本は第24位、中国は第15位)。また、日本経済研究センターが毎年実施している潜在競争力調査では、今後十年間に一人当たりのGDPがどれだけ増加する可能性があるかを「企業」「科学技術」など8分野の指標を分析し、各国地域の順位付けをしているが、本年1月の発表では、香港は昨年を引き継ぎ第1位となっている。これは、一昨年の第3位から、米、シンガポールを



前香港行政長官 董建華氏との再会を楽しむ(2006年11月)左端:董建華氏、右端:筆者

抜いて第1位となったものである(本年、日本は第12位、中国は第35位)。これらの指標を見る限りでは、中国本土、日本と比較しても香港経済は質の高い効率的なものであると言えるのではないか。

97年の返還直後には、アジアの金融危機に連動した経済危機に見舞われ、その後の景気後退と長きにわたるデフレにより、悲観論も出た状況を見事に克服し、健全な経済発展を取り戻したことを示しているように思われる。

7. 香港経済の発展の背景には、中国本土のめざましい発展がある。香港は、華南地方を初めとして中国本土との相互依存関係を深めながら、経済を発展させてきた。香港は、世界が中国に入り、中国が世界に出るための大きな玄関口としての機能を果たし、そのことが中国経済に大きく貢献している。物流の中継地として中国と世界を繋ぎ、金融センターとして、世界の資金と中国の資金の橋渡しの役割も果たしている。大量の労働力を要する製造業が本土に移動している一方、香港では、高価値を生み出す製造業及び金融、保険、会計、法律事務、観光業のようなサービス業が大きく伸びている。香港の港湾は高度に効率的な運営で大量のコンテナを処理し、巨大な量の物資を世界から中国に入れ、中国から世界に出している。

8. 香港返還当時は、香港経済は中国経済に飲み込まれてしまい、中国内の他の諸都市と並ぶ都市の一つになってしまうだろうと言うようなことを唱える者が多くいたが、現状を見れば、香港は中国の他の都市とは異なる特徴を維持した都市としての存在を引き続き維持していると思われる。香港基本法の下、返還後五十年間にわたり、「一国二制度」が保証されている。コモン・ローによる「法の支配」の意識は強く、高度の自治を有する行政、立法、独立した司法制度を基盤として資本主義的な自由市場経済制度が、きちんと整備された法体系の下で維持され、世界の市場と直結していることが大きな要素である。香港市場の規制は世界の中でも少ないと言われており、企業活動、貿易、金融活動の自由が保証されている。経済構造は柔軟性を有し、変化への対応が迅速である。企業活動関連の税金も低い。官僚組織は規模を小さく、汚職防止委員会の厳

しい監視も健在で、政府の清潔度及び透明度は高いと考えられる。これらは、他の都市にはない特別な要素となっている。この点では、上海もまだとても及ばないのではない。中国自身、社会主義を維持しながら、経済の市場化へ向けた改革努力を目指し、国際市場を睨んだ国内制度の整備、汚職の撲滅等の努力を継続しているが、香港は市場経済の先駆者で、一つの模範例を示しているとも言えよう。また、中国企業が香港の証券市場で上場を積極的に行っているが、これは、これらの企業が世界に通用する香港の国際市場に身を置くことを意味し、国際的な市場スタンダードを身につける場ともなっている。また、香港大学等は、世界的にも高い水準にあり、成熟した自由市場に欠かせない法律家、会計士、インベストメント・バンカー、ICT技術者等の高度の人材を数多く育成している。

9. 香港の識者の話を聞くと、中国内の他の諸都市も大きな努力をしており、香港も安閑とすることは出来ず、絶えず香港としても中国内で独自の役割を見出せるよう知恵を絞って行く必要があると言う。金融市場の高度化、観光を含むサービス産業の充実、国際的イベントの開催などが例

としてあげられているが、もとより、将来を切り開くための、香港の機能の強化のための弛まぬ努力が不可欠であろう。また、大気汚染等環境問題を心配している者もいた。本土とも協力しながら、汚染源に対する対応も重要である。

10. 返還の頃、「一国二制度」と言っても、香港は次第になし崩的に変わってしまうのではないかとの懸念の声も良く聞いたところである。これまでのところを見ると、中国政府は、香港の独自の立場を尊重しており、「一国二制度」は、基本的に順調に機能していると思われる。香港の民主化の問題をめぐっては、民主化の速度をめぐる政治的な緊張も見られ、今後も議論は続くであろうが、全般的な政治的安定性を損なう状況ではない。中国にとってみれば、異なる制度を有する香港の存在を安定的に維持することは、利益になることではないかと思われる。また、日本から見ても、また、世界から見ても、香港が安定した形で繁栄することは、利益になることである。香港経済は中国経済と密接な関係をもちながら発展して行くと考えられるが、日本を含む世界経済との強い関係をも維持しながら、中国経済に健全な形で貢献して行くものと期待したい。
(2007年7月)

香港返還 10周年記念イベント

5月31日、経団連会館にて、「香港返還10周年記念シンポジウム 進化する香港～潜在競争力『世界一』の秘密を探る」を開催しました。これは、(社)日本経済団体連合会と香港貿易発展局とが事務局となり運営する「日本・香港経済委員会(香港側では「香港・日本経済委員会」)」の年一回の合同会議に行い、両委員会が返還10周年を記念して主催したもので、350名以上もの産業界の方々に御参加頂けた大変有意義なシンポジウムとなりました。

また、このシンポジウムに合わせ、高い経済成長率を維持する香港の強さの秘密を分析した書籍「進化する香港」も6月1日に発売。この度の出版に至ったきっかけは、(社)日本経済研究センターが発表した「世界50カ国潜在競争力」で香港が2年連続一位となり、その競争力の源泉を探ろうと、2006年2月に、日本のシンクタンクのエコノミスト10数名による香港・中国華南地域へのミッションを企画したことによります。この一年間の調査研究をまとめたこの本は、中国と共に発展し、益々輝く香港経済の秘密を解き明かすものとなりました。

また、シンポジウム終了後のカクテル・レセプションでは、日本経団連御手洗富士夫会長に乾杯のご挨拶を頂き、情報交換として有意義な場となりました。



レセプション会場にて(左から 鈴木邦雄日本・香港経済委員会委員長 御手洗富士夫経団連会長、馮國経香港・日本経済委員会委員長)



シンポジウム会場にて

日本香港協会初代理事長 故伊東正身さんを偲んで



日本香港協会理事長 財前 宏

日本香港協会初代理事長伊東正身さんは去る3月9日亡くなられた。享年81歳であった。私と協会発足時の伊東さんとの出会いは1988年の香港であった。当時はNIESの勃興期でもあり、日本・香港の経済関係も最高潮であり、日本企業も徐々に広東省に進出しつつあった。その意味では香港協会の設立は誠に時宜を得たものであった。一方、香港では1997年問題があり、人々は重苦しい雰囲気の中にあり、企業でも中堅幹部は万一の場合に備え海外移住とか、家族を海外に移し、単身、香港で働くとか香港人は言い知れぬ苦勞をしていた。

1988年の暮れであったかアドミラルティにある私の事務所に伊東さんが訪ねて来られた。伊東さんは商売の話ではなく商工会議所に関連する話で、と切り出され「香港に世界各国の香港協会が一堂に会することとなったので、是非一緒に出席して欲しい」と要請された。

この年にワンチャイにConvention & Exhibition Centreが出来、そこに集まるとのことであった。私は深い事情は知らずにおそらく世界の華僑の集まりが時々あるのでそのような会であろうと想像していた。ところが、驚いたことに出席者の大半は欧米人であった。飛龍の50周年記念号(2005・7)に伊東さんも寄稿されているが、その中で設立当時の香港の様子と共に、“20年に及ぶ香港勤務による現地の人々との交流と人々との縁は宝物のように尊く輝き、私の人生はより豊かなものとなりました。この機会に恩返しとの強い思いから、香港側の要望に応え協会設立に至り”と書いて居られる。香港側の要望とは当時のTDC東京のMr.Yauから(1987・8)突然呼び出しを受け「日英協会とか日豪協会のような交流団体は幾つもあるが日本と香港の橋渡しをする民間ベースでの協会が無い。会員制の組織による協会が出来れば有り難いのだが」との話があり、更に88年には香港政庁のウイルソン総督が初めて日本を訪問し、日本国民に呼びかける講演会もあるので受け皿となる団体も必要とのことで、必要資金、人的資源など見当もつかないまま(伊東さんには荷の重すぎ

る、無理な話だと思はれたのだろう)「TDCのファシリテイトとスタッフを協会のために使用させて貰うなど財政的援助も含めた支援が欲しい」と言われ要請を受けられたようだ。このときの伊東さんの決断が今日の協会の元となった訳だ。

当時のTDC総裁のリディア・ダン女史(その後、英王室より爵位を受けバロネス・ダンとなる)とか会長のジャック・ソー氏などの発案とも考えられるが、97年以降を見据えて世界中に香港協会のネットを巡らせようとの考えで、香港の将来に対する安全保障に繋がるわけでその先見性には頭が下がる。2000年に至り組織化され香港フォーラムという大組織になった。



奥さんお孫さん達とくつろぐ伊東正身さん

さて、日本での協会造りに奔走された伊東さんのご苦勞は並大抵のものではなかったと想像できる。香港から日本に帰られた方々でも、まだ現役として仕事を持っておられる方々が大半であったろうと思うが、この人達を組織化するのには言うに言われぬご苦勞があったものと思う。伊東さんの謙虚なお人柄で自らあちこちに出向かれ纏め上げられたことと思う。

飛龍創刊号で伊東理事長のご挨拶の中に「丁度、白紙の画面にこれから絵を画いてゆく、それも会員各位の手で、一筆、二筆、絵の具を塗ってゆく段階にあるやと譬えられ、慣習に捉われない、自由で新鮮な発想で新しい歴史をつくってゆくことが出来ればと、期待いたします」と述べられている。初代理事長の遺志を継いで当協会が更に新たな発展をしてゆくことを皆で祈念したい。

香港新時代

日本写真協会会員 金子 晴彦

香港返還十周年を迎えた。別れを惜しむのか、はたまた未来を思うのか、返還式典の土砂降りの雨の中の無数の花火が忘れられない。一国二制度五十年を人の一生に例えてみればちょうど成人になったことになる。この間に経済的には弟だった中国は一気に成長した。しかしそれは均質性を欠いた部分的な成長でありさらに様々な面での成長が求められている。他方、成人に達した香港は正にこれからその生存の意義を再認識し、自分のなすべきこと、生きる方向を固めて世界の中で本格的な活動を展開しなければならない。

では具体的にはどんな？と聞かれても、門外漢の単なる香港ファンには政治・経済は分からない。そこでひとつだけ分かる方向を示したい。香港の自然の活用だ。

最近漁農処はカントリーパーク関係のガイドブックを矢継ぎ早に出している。自分が管理している場所を広く民間に知らせたい気持は分かるが、これだけ立派な写真集でも説明文は中英日となるとそこには香港の自然をアピールし守ろうと言う強い意思を感じざるを得ない。

ガイドブックは毎年7月に一斉に発表されるが今年はオーストラリア人写真家エドワード・ストークス氏撮影になる西貢諸島の写真集を中心に10冊ほどの新しいガイドブックが登場する。

その今年の作品の中でもうひとつ注目したいのが「新・ランタオ案内」だ。かつて香港の秘境として、また仏教の聖地として幽邃の趣にあふれていたランタオはその北側に新空港ができて一瞬の内に香港の表玄関に変身した。この変身の前に東涌などという村に足を運んだ粹人は一体どのくらいいただろう(ぼくらは出かけた)。それが今ではセントラルからわずか30分、5万人が住む新興住宅街だ。かくて香港特有の開発意欲が堰を切ったようにこの島にあふれつつある。その活動の中で最もユニークなのがランタオの自然との融和を念頭においた開発だろう。その詳細がこの「新・ランタオ案内」に紹介されている。

ビクトリアピークは長らく香港観光のメッカだった。しかし、さすがに長年の使用で色あせてきた。それに対し、東涌を起点としたこの一帯は香港の活気と自然が渾然となった次の時代のメッカとなるべき場所だろう。

ランタオでは2005年に竹嵩湾(Penny's Bay)に香港ディズニーランドがオープンしました。その翌年にはトンチョン(Tung Chung、東涌)とゴンピン(Ngong Ping、昂坪)を結ぶケーブルカー、ゴンピン360が完成しました。最近生まれたばかりのこの二つの観光施設はこの島を香港有数の観光スポットに変身させてゆくことでしょう。以下、紙面の制約から取りあえず、後者とそれに関連して今回開設された新名所「心経簡林」のご紹介に充てたい。

ゴンピン360(昂平360 Ngong Ping 360)

ランタオ中西部のゴンピンは海拔460メートルに位置する102ヘクタールの高原です。高度のせいで霧や湿気が多く、土壌は肥沃です。修道僧や僧侶がこの無垢の土地



視界抜群アジア最長のケーブルカー

に住みつきました。

かつてゴンピンに行くにはトンチョン道、ランタオ南道、羌山道そしてゴンピン道と24キロの距離を車で行く必要がありました。その半分は急な峠道で大量の交通量をさばくには不十分で50分もかかりました。このため政府は道路拡張を進め、そして今、新しい輸送手段が導入されました。

2004年2月、トンチョンとゴンピンをケーブルカーで結ぶプロジェクトが立ち上がり、2年半の工事を経て2006年9月18日に完成しました。トンチョンからゴンピンまでは5.7キロ。複線の空中ケーブルで、3つの部分に別れ、8ヶ所ある塔に支えられています。登るにつれ視界は広がり高度420メートルまで来るとランタオとその向こうの360度の景色が楽しめます。

心経簡林(Wisdom Path)

ゴンピンのバス停から宝蓮禪寺の右手にある小道をゆくと15分ほどで心経簡林に着きます。2005年5月20日に完成したゴンピンでは最も新しい名所です。高さ8—10メートル、幅1メートルの巨大な木筒が38本もあり(巨大な木を半分は断ち切ったもの)、一帯の地形にあわせて∞(無限)の形になるように並べられています。木筒には中国研究の第一人者、饒宗頤(Jao Tsung-I)教授の書になる般若心経が彫られています。

般若心経は高名な仏教経典で正式には摩訶般若波羅蜜多心経と言います。摩訶とは大いなる意思、般若は悟

りを開く至上の知恵、波羅蜜多は彼岸への到達と言う理想の実現、そして心経は人の心臓にもたとえられる重要な経典と言った意味です。

以上ゴンピンの数ある名勝のごく一部を紹介したがケーブルで登り、一帯を歩き回りバスで帰ればわずかな時間で香港の魅力をたっぷり味わうことができるだろう。 以上



心の安らぎを誘う聖地

「どうして今、広東語？」

日本香港協会広東語教室・入門クラス 久須 美圭子

香港返還10周年…この時期日本でも特別番組がたくさんあるだろうなと期待していたら、無い!この期に「広東語シャワー」をと思っていたのに…、今年の春から「広東語入門クラス」をとり始めた私はガックリ。

さて、私の香港通いが本格的に始まったのは2000年くらいから。きっかけは王家衛映画。元々、1930年～40年の上海（自由劇場の「上海バンスキング」がきっかけ）に憧れていたのと、ヨーヨーマのアルバム「SOUL OF THE TANGO」がお気に入りだっただけに、王家衛の世界はストライクゾーン、映画の舞台を歩きたいというのが始まりで、そこからはもうあれよあれよと香港の魅力に引き込まれ…。ちなみに、韓国エンタメも香港で一足先に洗礼を受け、私にとって、香港はアジアラビリンスへの案内人です。

そんなこんなで、「香港」という単語に過敏になっていた2004年頃のある日、香港の劇団の東京公演を知り、内容もよくわからないまま新国立劇場へ。これって、いったい？

以下、その時アンケートに書いたコメントの一部（あまりに印象深かったので家に帰ってから記入し、後日先方にFAX）。

「昨日『the-Game』を見ました。拍手!私にとって、不思議な出会いでした。そもそも、何の予備知識もなくただ『香港』という二文字だけに惹かれてチケット予約をし、その後これが不条理劇らしい、イヨネスコらしい、etc…、と知るに連れ正直言葉もわからず大丈夫かなあと不安でいっぱいのまま、誰も誘わずに一人で見に行きました。…中略…

幕が開くと、ウトウトどころか途中から字幕を見るのも忘れてのめり込み、可笑しくて、可愛くて、怖くて、したたかで、哀しくて、人間は限りなく阿呆…でも見捨てられない。広東語の歌う様なサウンドにぐるぐる巻き込まれ、目の前に展開する世界に飲み込まれ、あっという間にラストシーン。理論的には芝居の意味が理解できなかったかもしれませんが、何かを感じ取ったような気がします。…中略…

混沌とした時間の中で複雑なバックボーンを背負って今を生きている街(香港?)が愛おしく感じられ、感情の波が素直に押し寄せてきた不思議体験でした。音楽や絵画以外でも言葉の壁は越えられるのですね。是非次回は香港の劇場で、お行儀の良くない人達と、お芝居を堪能したいと思います。素敵な出会いをありがとうございました。」

公演後のティーチンでは、生まれてはじめて質問などしてしまった自分に又ビックリ。

映画は字幕に目が行き、音楽だといつメロディーに気をとられがちですが、さすがにお芝居は、言葉の響きそのものに魅きつけられます、その時初めて「広東語をわかりたい」との気持ちが芽生えました。後でわかったのですがこの詹瑞文率いる「劇場組合」、香港では第一級の劇団だったんですね。さっそく劇団HPをお気に入り登録。

あれからずっと、香港に行く前には必ず劇場組合をチェック、でもタイミングが合わず、観劇かなわず。そして、何回か渡港しているうちに香港在住の友人もでき、かなり気ままに歩き回れるようになりましたが、言葉の方はなかなか



出演者と楽しくコミュニケーション、写真撮影や握手もウェルカム(06・12・15「錫錫啤啤熊」上演後のロビーにて)

難しく。なんとなく英語でごまかせてしまうし、ディープな場面では快く手伝ってくれる地元の知人のおかげで、コミュニケーションがとれるような気分になっていましたが…。

昨年の12月、急に休みが取れたので香港へ。わっ、劇場組合の公演もある!～聖誕親子兒童音楽劇場「錫錫啤啤熊」～、クリスマス恒例子供向け音楽劇。現地に着いてすぐ、香港文化中心のチケットボックスへ。そして次の日、灣仔の香港藝術中心へ。すごい、親子づれで満員、独りの私はかなり浮いてる(笑)。まわりの子供達は既にテンション高し、ワクワクの開幕、胡桃割人形風キャラ、笑い、涙、じわ～と感動、主人公の動きがメチャクチャ可愛い、舞台と観客が一体になって盛り上がり、あれ、ストーリーがわかる、どういうこと?でも大人だけに受けてる部分は不明、残念。主人公が「パンヤオー」と叫ぶ場面が脳裏に焼きつき、見終わってもテーマソングが頭の中をぐるぐる。あ～、もう一回見たい!!帰国前日、当日券狙いで再度劇場チケット売り場までいってみましたが完売。あきらめきれず受付の劇団員に直接きいてみましたが、やはり余り券なしで(探してくれたんですが…)、VCDを購入したのみで我慢、面白かったから再度見に来たこと、前に東京で公演を見たことがあるという事を、つたない英語で何とか伝えましたが、彼らの対応がすごく一生懸命で感じ良かったので、「あ～こんな時広東語で話せたら」とつくづく実感。そして、お芝居も言葉がわかれば百倍楽しめるはず、これはきっちり広東語習うしかないでしょう、と決意を新たに帰国の途についたのでした。ちなみに、「錫錫啤啤熊」の総監督はあの「The Game」演出・出演の詹瑞文氏でした。

そして今年春から広東語を習い始め、この夏の劇場組合公演「悪人谷」が気になってしかたがない今日この頃です…。

※ご参考

劇場組合 (THEATER ENSEMBLE)

<http://www.theatreensemble.com/>

KANSAI

支部 便り

「第5期を迎えたCMMS」

関西日本香港協会理事 齋藤 治

関西日本香港協会が主催する「チャイニーズ・マネジメント&マーケティング・スクール(CMMS)」の第5期が、9月からスタートする。例年、6月に始まり、翌年3月末に終了する30回の講義を行ってきたが、今年は秋から翌年6月までに変更した。華人の背景にある中国社会や思想を大学の専門研究者から学ぶ理論編、その理論が現実のビジネス社会で、どのように生かされているのかを一線活躍している経営者や専門家に検証してもらう実践編という2部構成の大枠に変化はない。

しかし、同じテーマでの講義でも、先生方から最新の情報を聞くことができる。ビジネスに関係している講師はもちろんだが、儒教など中国の古典についてもアカデミックの世界で何が問われているのかを知ることができる。CMMSがスタートした当時から、現在でも「中国ビジネスをうまくやるのが目的で、どうして中国の古典や社会構造を勉強する必要があるのか」という反論はついて回っている。

貿易やマーケティング、中国の関係法規などを知ることはもちろん必要だ。しかし、表面的なノウハウだけでは、形を変えて登場するリスクに対応できる応用力はつかない。事象の背景に何があるのかを理念型を用いて分析、次にどうなるのかを推測する。その訓練を30回の講義を通じて行っているのだ。

「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」という孫子の教え通り、まずは相手のこと知ることなしに戦略を立てることはできない。さらに「己を知る」ことの重要性も、CMMSの運営に関わって痛感するところだ。華人経営のスピードや決断力、それらに大いに学ぶ点はある。しかし、日本の経営の良さも強く認識できた。華人社会になぜ技術革新がうまくいかないのか。同僚を助け、最終的な目標に献身できるチームワークなど、日本の誇るべき点を見直すことができる。華人経営を学ぶことは、日本経営の美点、欠点を冷静に判断できる機会としてもCMMSは有効だ。

5年目を迎えて、新たな講師も迎えている。香港の華人経営者として著名な萬友貿易会長のダニエル・シャオ氏に香港からお越しいただく予定だ。シャオ氏は昨年11月に大阪で開かれた日中経済討論会のゲストとして来日されたが、その折、忙しいスケジュールの中、CMMS受講者に特別講義を行った。日本とはビジネス以外にも関係が深い。香港機能を活用した日系企業の中国ビジネス戦略について、実務家の立場からアドバイスをってもらう考えだ。

CMMSの生みの親である香港貿易発展局日本首席代表の古田茂美氏には、開講式には迫力満点に檄を飛ばしていただく。のっけから受講生の脳を刺激し、活性化してもらおうとお願いした。1回に限定せず、古田さんが来阪される折に合わせて、特別講義をできないかと事務局で検討しているところだ。

関西日本香港協会の元理事で、かつて講師をお願いした伊原吉之助・帝塚山大学名誉教授には、「中国近現代の歩み」を講義していただく。CMMSの卒業生が中心になり、毎

月1回、講師を招いて例会を開いている。伊原先生はOB会で、参加者を圧倒する元気さで講義をされたこともあり、CMMSにカムバックしていただいた。伊原先生の年齢を感じさせないパワーと中国研究への情熱を感じてもらうだけでも、受講者には大いに意味があると思っている。

関西日本香港協会が主催することもあるが、西田健一会長、戒田真幸事務局長には講師陣に加わっていただいた。これまで培ってきた華人社会とのビジネスの極意などを、惜しげもなく公開いただけると期待している。

香港からの筒井修・太陽商事董事長、川副哲・肇英実業董事長、上海からは田谷野憲・ダイキン工業専務執行役といった常連の講師の方々には、本当にお忙しい中を縫って、大阪で今回も講義をしていただくことになった。ほとんどボランティア精神で、引き受けていただいているが、CMMSの意義にみなさんが賛同しているからにほかならないと感謝している。溝口雄三・東大名誉教授、濱下武志・龍谷大学教授を始めとした日本を代表する学者のみなさんが集っていただいたのも、CMMSに志があったからだと思う。学問と実社会をつなぐ試みは、著名な学者の方々にとっても役に立っているとの感想を聞いている。

節目の第5期は、例年以上に刺激的な講義としていきたい。7月から受講生の募集を行うが、1人でも多くの参加を目的にPR活動を展開するつもりだ。CMMSをモデルとして立命館大学の社会人大学院やJETROで講座が開かれている。中国、香港への理解を深め、交流の架け橋となっているCMMSをさらに充実させていきたい。

飛龍 No.56 2007年8月発行 (禁無断転載)

日本香港協会 広報委員会

香港貿易発展局東京事務所内

〒102-0083 東京都千代田区麹町3-4 トラスティ麹町ビル6階
電話 (03) 5210-5870 FAX (03) 5210-5860

関西日本香港協会

〒541-0052 大阪市中央区安土町2-3-13
大阪国際ビルディング10階 香港貿易発展局内 電話 (06) 4705-7030

中京日本香港協会

香港貿易発展局大阪事務所気付
〒541-0052 大阪市中央区安土町2-3-13
大阪国際ビルディング10階 香港貿易発展局内 電話 (06) 4705-7030

北九州支部

〒802-8522 北九州市小倉北区紺屋町13-1
北九州商工会議所 国際部内 電話 (093) 541-0181

福岡支部

〒810-0013 福岡市中央区大宮2-3-7
協同組合福岡情報ビジネス内 電話 (092) 534-6331

山形日本香港協会

〒990-2432 山形市荒橋町1丁目14番21号
(株)日本不動産コンサルティング内 電話 (023) 633-2110

北海道日本香港協会

〒060-8661 札幌市中央区大通西3-11 北洋銀行国際部内
電話 (011) 261-4288 FAX (011) 232-6921

宮城日本香港協会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町3-7-23 明治安田生命仙台一番町ビル3階
(株)JT東北 交流文化事業部内
電話 (022) 212-5552 FAX (022) 212-5556

URL <http://www.jhks.gr.jp>

関西支部

「女優 三林京子氏を囲む会」(文化部主催)

関西日本香港協会 理事・文化部長 戒田 真幸

関西日本香港協会文化部主催の講演会が6月11日に香港貿易発展局大阪事務所のセミナー室で開催され、27名が参加しました。今回の講演はテレビや舞台でおなじみの女優、また桂米朝師匠の落語門下生でもある三林京子氏(桂すずめ氏)をお招きして、「女優、三林京子氏を囲む会」が実現しました。ご自身が芸能界入りされたいきさつ、芝居や落語の修業をされた時の師匠やまわりの人達との人間関係における思い出深いエピソードや奥深い芸の世界のお話を、さすがと感心させられる素晴らしい迫力ある話術で話され、聞き惚れているうちにあっという間に1時間半が過ぎてしまいましたが、参加者からの沢山質問があり本当に楽しい画期的な講演会になりました。

三林京子氏は昭和26年に大阪で生まれ、父上が「重要無形文化財」の文楽人形遣い桐竹勘十郎(1986年死去)で、弟の吉田蓑太郎(三世桐竹勘十郎を襲名)や甥の吉田蓑次も文楽人形遣いで文楽一家に育ちました。小さいときから明るく活発で、小学校4年生の時に父親がNHK児童劇団の願書をもって帰られて入団し、昭和40年中学2年生の時にNHK大阪児童劇団を卒団して大女優、山田五十鈴さんのもとで付き人修行をされました。卒団前には、父親が関西若手歌舞伎団を指導していた関係でよく中座に通われ、舞台装置や洗濯等の手伝いをしているうちに、本格的な芝居に興味を持つようになったとのこと。高校卒業後、東京で菊田一夫氏の面接を受け、昭和45年に東宝演劇部と専属契約を結び、芸術座「女坂」瑠璃子役で初舞台を踏まれました。菊田一夫氏に可愛がられている間は周りの人に随分親切に気を使ってもらったが、亡くなると急に冷たくされて一時人間不信になったことがあったそうです。

昭和50年にNHK大河ドラマ「元禄太平記」のおとき役でテレビデビューされ、ゴールデンアロー新人賞、日本映



文化部講演会で講演する「三林京子氏」

画・テレビ製作者協会賞を受賞されました。その後、舞台やドラマ・ラジオ等多数出演しておられます。

主な出演作品には、昭和52年「鳴門秘帖」、昭和60年「いちばん太鼓」、平成12年「オードリー」「葵～徳川三代～」、平成17年「ファイト!」などがあります。

落語家で米朝一門の藤間紫雀師匠が中学一年からの友人であったご縁で落語の勉強会に参加するようになり、平成9年に桂米朝師匠に師事、「桂すずめ」の名前を許されて正式に入門、米朝の米を食べる縁起の良い名前だと言われる。落語の奥の深い厳しい芸の修業を経験して芝居がより一層面白くなったそうです。

三林京子氏は、社会活動にも熱心に取り組んでおられます。平成4年には大阪市いちよう大学(高齢者大学)の初代学長に就任され大阪府教育委員、大阪市総合計画審議委員、大阪駅地区都市再生懇談会委員や文化庁文化審議会国語分科会委員などを務められました。また、本年度は大阪芸術大学短期大学部広報科の専任教授に就任され、学生の演劇指導をしておられます。若い世代の人にはガッツが欲しいと言っておられます。

作曲家の團伊玖磨先生と度々中国を訪問された際のエピソードも紹介され、中国人の活気のすごさ、旺盛な生活力、人生を楽しむ生き様、などを見て「中国のこれから」は恐いと思ったとの意見も述べられました。講演終了後に全員で記念写真をとり、楽しく有意義な講演会を終了しましたが、明るく気さくで素敵なお三林京子氏の今後の活躍をお祈り申し上げます。



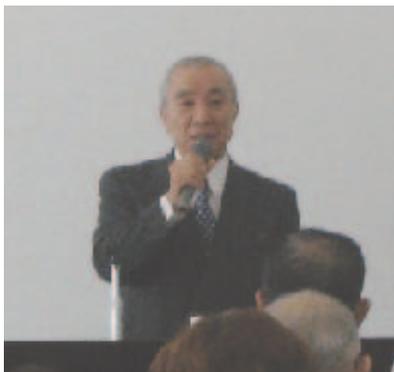
「女優、三林京子氏を囲む会」記念写真

香港ビジネスセミナー開催報告(東海東京証券との共催)

中京日本香港協会 理事 伊藤 真行
(東海東京証券 名古屋企画部長)

好調な景気動向が報道される名古屋の新スポットとして注目されているミッドランドスクエア。同ビルは、東海地区一の高さを誇る高層ビルであるオフィス棟と、ルイ・ヴィトンやカルティエといった世界的に有名な高級ブランドショップなどが出店している商業棟からなっており、開業から3ヶ月で入場者が510万人に達したと報道される(6月7日中日新聞より)など、正に元気な名古屋を象徴しております。

そのミッドランドスクエア12階の東海東京証券名古屋本社ホールにおいて、6月7日(木)に中京日本香港協会および東海東京証券主催による、「香港ビジネスセミナー2007」が開催されました。



セミナー冒頭挨拶される高橋会長

セミナー開始前に、協会理事の皆様にもミッドランドスクエア8階の東海東京証券ミッドランド・プレミアサロンを見学して頂きました。同サロンは富裕層を対象とし、高級感を演出した従来の証券会社

のイメージとは異なった店舗となっています。サロンの見学後は昼食をはさみ、和やかな雰囲気の中、意見交換を行いました。

セミナーには中京日本香港協会の会員の方や東海東京証券の顧客等、香港の金融事情や株式市場に興味のある方々が110名程参加されました。

冒頭に主催者を代表して、東海東京証券執行役員鹿

田忠孝の挨拶、そして中京日本香港協会長の高橋治朗様にご挨拶を頂きました。

第一部は、大垣共立銀行元香港事務所長で現



東海東京証券ミッドランドスクエア・プレミアサロン受付

在は審査部審査役でいらっしゃる堀尾幸生氏を講師に「返還10周年を迎えての香港の金融事情」と題して講演をして頂きました。中国元と香港ドルのリンクといった為替の話を中心に、堀尾氏が香港事務所長でいらした頃の話と交えて、香港の税制上のメリットや中国の経済制度など、香港経済の優位性について講演されました。講演後の質疑応答では、参加者から中国の為替制度について鋭い意見が飛び交うなど、活気のある講演でした。

続いて第二部では東海東京証券外国株式部営業推進役の林昇平より「香港株式市場、今後のゆくえ」をテーマに、北京オリンピックや上海万博を控えますます発展するであろう中国経済と、その経済成長の恩恵を被る香港株式市場について講演致しました。GDPや為替レートといった経済指標や香港・中国株式の現況などを解説し講演は終了しました。

そして、最後に東海東京証券代表取締役社長石田建昭による挨拶でセミナーは成功裡に終了しました。

終了後も会員の方から講師に質問する姿が見られるなど、参加者の香港経済への関心の高さが感じられるセミナーとなりました。



講演をされる堀尾氏



熱心に耳を傾ける参加者



閉会の挨拶をする東海東京証券 石田社長

日本香港協会福岡支部 理事・事務局長 辰元 登

福岡の自動車産業

福岡における新聞報道等によりますと、トヨタ自動車はエンジンの生産は愛知県豊田市周辺のみが存在する3つのエンジン生産拠点から、この度新たに2005年から稼動してきましたトヨタ福岡県荏田工場においてもエンジン組み立てを開始することを発表されました。工場建設予定地は北九州団地内の20ヘクタールを予定していると言われます。

現在トヨタ自動車や日産自動車が北九州地区に進出以来生産された完成車数は2006年において、既に国内自動車総生産数の一割に相当する100万台に達し、いまや150万台生産構想までに発展し、国内外から深い関心が寄せられている現状であります。

このような福岡の状況下におきまして、昨年9月14日に駐東京経済代表部祝彭婉儀首席代表、香港貿易發展局古田茂美日本首席代表、香港政府観光局加納日本・韓国地区局長等の各代表並びに香港協会福岡支部並田正一会長が一体となり、福岡市の中心に存在するグランド・ハイヤット・福岡におきまして、日本・並びに中国の最新の経済・自動車産業等の実態等について詳細な講演が行われました。当日は福岡の官界、経済会、報道関係者が200名以上も出席されました。

開会には麻生渡福岡県知事もご参加下さいまして開会の音頭を執っていただきました次第です。

特にWKK JAPAN LTDの代表取締役原田光夫様や元ホンダ汽車有限公司の門脇轟二様の中国において直接自動車産業に当たられたご経験などで外では決して聴く事の出来ない極めて貴重なお話でありました。



香港・中国自動車パートナーシップセミナー

福岡支部理事会及び総会報告

私共の福岡支部におきましては去る4月26日に福岡の西日本新聞社会館16階の九重の間におきまして当会第15回総会を開催いたしました。総会開催に先だちまして、理事会において提案事項の説明を行いました。理事会・総

会には私共の為にわざわざ遠く東京の香港貿易發展局から古田茂美首席代表並びに、この度新たに香港貿易發展局大阪事務所長に赴任されましたフェリックス・チャン様もご参加賜りまして、大変盛大な会議が出来ましたことを福岡支部会員一同深く感謝致しています。

私共の会議が終了直後、同じ会場にて昨年と同様に古田首席代表による最新の香港・中国に関するご講演が始まりました。古田首席代表のお話は何時お伺い致してもその斬新性には私共一同感服致す外はありません。

これからも何卒ご指導をお願い致します。



福岡支部総会における香港貿易發展局幹部

ビジネスセミナー報告

私共の4月26日に同時開催の福岡支部の理事会、総会が終了いたしました直後に同じ階の別の間の「志賀の島」におきまして香港貿易發展局主催、福岡商工会議所・福岡日本香港協会後援の香港・中国食品販路拡大セミナーが開催されました。特に食品産業にターゲットを絞って開催されました食品関係のセミナーでありましたため、来場者数は80名にも達する多くの来客を集め、しかも講演者は古田首席代表並びに香港・中国に跨る食品関係において、長い間、食材・食品関係の事業を展開された相澤社長でも有り一般聴講者に対し深い関心を与え大変時宜を得たセミナーで有り特に、福岡と中国は日本の何れの地区よりも地理的に近く、相互に新鮮な食品を求める傾向が表れている現況からしましても最も時宜を得た講演会でありました。



香港・中国食品販路拡大セミナー

YAMAGATA

山形支部

支部便り

香港での暮らしを楽しむ

リブネ宮崎紀子

香港在住も早いもので10年目になりました。香港での生活は刺激的で、本当にあっという間でした。

私の香港での暮らしについて、ちょっとお話ししたいと思います。

香港中文大学日本研究学科で、非常勤日本語講師をしていますので、授業のある日は大学に行きます。

タクシーで最寄のMTRの駅まで行った後、KCRに乗り換えて、大学駅で下車します。通勤時間は1時間ちょっとです。講師室で授業準備をして、いざクラスへ。副専攻や選択科目として履修している学生に日本語を教えます。学生は日本のサブカルチャーに親しんでいて、漫画やアニメ、日本のスター情報、テレビゲームなど私よりも詳しいほどこです。日本のヤフーオークションで買い物を楽しんでいる学生もいますし、SMAPのコンサートやホームステイなどで、日本に頻繁に行っている学生もいます。授業が終わったら、学食でランチをいただきます。中華ランチセットで、30HKD(約450円)ほどです。スープとメイン料理、ご飯、小鉢、デザートがついています。午後は、大学に残って仕事をするか、そうでない場合は、銅羅湾に寄って、そごうの本屋さんや、日本語教育専門書店、日本人倶楽部などで用事を済ませます。時間がある時は、アロママッサージを受ける事もあります。日本人女性が個人で経営している



ワンチャイロータリー倶楽部でのハロウィンパーティー



香港の学生を自宅へ招待

サロンで、もう何年ものおつきあいです。夜は、多国籍の友人達や卒業した教え子達とレストランでディナーをいただくこともあります。4年前に、私のクラスの学生3人を山形に連れて行って、ホームステイや交流プログラムを実施した事がありました。その時のメンバーとは、今でも定期的に会っています。それから家に帰って、娘に添い寝をして、2時間くらい仮眠を取ります。それから、自分の研究や執筆、授業準備などをします。忙しい毎日ですが、これからは山形と香港の交流で何かお手伝いをさせていただければと考えています。

香港便り

設立40周年を迎えた香港柔道館

香港の柔道人口は現在2万人と言われているが、柔道を通して日本文化の普及に尽力して来た岩見武夫氏の香港柔道館が40周年を迎え、今年1月20日新装なった日本人倶楽部において、中曽根康弘元首相はじめ300人を超える世界各国の柔道関係者の参加を得て盛大に創立40周年祝賀会が開催された。岩見氏が学生時代、師と仰ぎ門下生として修行していた経緯があり、弟子の今日を祝っ



中曽根元首相より記念品の贈呈を受ける岩見氏

て駆けつけた中曽根元首相は挨拶の中で岩見氏をクラーク博士のBoys be ambitiousの正しくboyだと引用し、最も大きなambitionを持って実践した人だとして、これまでの香港での実績を称えた。香港柔道館は1966年プリンスエドワードロードで僅か25畳の道場からスタートしたが、現在は約4倍の規模で家賃世界一と言われるコーズウェイにあるそごう百貨店ビルに移って20年になる。

岩見氏は「柔道の海外普及と日本と諸外国との友好親善に寄与した」という理由で1999年日本国外務大臣表彰を受賞されたが柔道館長としての活動に加え、長年に亘り日本人倶楽部理事として活躍し日本人墓地管理委員長として荒れ果てた墓地を整備修復、また、香港日本文化協会コンスルメンバーとして港日文化交流の架け橋を担い、邦人安全対策協議会では座長として邦人の安全確保の為に尽力している。

最近のエピソードとしては、新たに発足した東北六県の県人会の集まりである東北六県会の名誉会長に就任、20カ国に及ぶ国際色豊かな門下生を有する香港柔道館のますますの発展と同氏の今後の香港での活躍をお祈りしたい。

6月の札幌にお祭りシーズンが到来 第16回YOSAKOIソーラン祭りのご紹介

今回は北海道からお祭りの便りをお知らせします。札幌では5月上旬に桜と梅が同時に開花し、新緑の季節の訪れを告げます。5月には街に花が咲き始め日増しに街路樹の緑が濃くなっていきます。

そして気温も20度を超えるようになり、外での行事が楽しくなり、小学校の運動会が終わると6月です。屋外でのバーベキュー（札幌ではバーベキュー＝ジンギスカン）の機会が増え、またゴルフ好きの方はフェアウェイの新緑がとても魅力的に思える季節を迎えます。

この、絶好のシーズンに札幌で行われるのが「YOSAKOIソーラン祭り」です。今年は第16回目で6月6日(水)から10日(日)まで開催されました。市内中心部の大通パレード会場やすずきの会場など市内中心部の道路を閉鎖したものや、市内近郊のスーパーやテーマパークの駐車場などを利用したものなど各地の30の会場を341のチームが5日間に渡って踊りまわります。

また今年の特色は「夕張会場」が新たに設けられたことです。

さて、「YOSAKOIソーラン祭り」ですが、観るよりも参加するほうがより楽しいイベントとして有名ですが、今年の341チームのうち、北海道以外のチームは約40チームで、うち外国のチームはというと、アメリカからの参加が2チーム、台湾から1チームと、残念ながら香港のチームのエントリーはありませんでした。

参加チームの目的は様々ですが、最高の栄誉は「YOSAKOIソーラン大賞」です。今年は4年連続で強豪チームが連覇を果たしましたが、大賞奪還を掛けたライバ

ルチームの意欲的な演技も観衆の共感を誘いお祭りを盛り上げました。

会期中は連日、6月の好天に恵まれた今年の「YOSAKOIソーラン祭り」でしたが、最終日10日(日)の午後3時頃から札幌の市内中心部は雷雨となりました。「ファイナルステージ」への参加が決まったチーム以外の殆どのチームは最後の演技とあって、雨の中でも「晴れ晴れとした」演技を披露していました。

実は筆者が取材を行ったのもこの時間帯で写真はご覧の通り雨の景色となりました。

決して雨男ではありませんが、何故か「YOSAKOI」を見に行くと雨にあたるのは気のせいでしょうか。

札幌では「YOSAKOIソーラン祭り」が終わると、「北海道神宮例祭 札幌まつり」が6月の14日(木)から16日(土)にかけて行われます。明治5年以来の例祭です。

有名なのは渡御(とぎょ)と呼ばれ様々な装束をまとった1200人程が山車を含めて札幌市内を練り歩く行事です。また子供たち人気なのは北海道神宮の境内や中島公園を埋め尽くす出店の行列です。

札幌では「お祭り」と言うところの北海道神宮際を示すほど一般的で、昔は多くの会社が休業日にしていました。今でも市内の小学校は一日だけですが午前中で終わります。

6月は初夏の日差しがとても心地よい「お祭り好き」にも「ゴルフ好き」にも最高の季節です。

7月には「ビール好き」にはたまらない「大通公園ビアガーデン」も始まります。

皆様のお越しをお待ちしています。

市内の道路を閉鎖して行われる「YOSAKOIソーラン祭り」
最終日の午後の雨も参加者にはクールダウンの恵みの雨に



MIYAGI

支部 便り

宮城支部

「設立記念セミナー・祝賀会」を開催

宮城日本香港協会は昨年11月17日に発足しましたが、本年、実質的な活動を進めるに当たって、改めて、5月11日(金)に「設立記念セミナー・祝賀会」を開催しました。参加者は70名と、当初計画の50名を上回り、盛況な会合となりました。

記念セミナーでは、日本香港協会の財前理事長にご挨拶をいただき、香港貿易発展局日本首席代表の古田様に活況を呈する香港の経済事情について、香港政府観光局日本・韓国地区局長の加納様には変貌著しいマカオや香港観光の魅力など、それぞれご講演いただきました。また、講演後の祝賀会では、村井嘉浩宮城県知事をはじめ一力一夫河北新報社主、仙台商工会議所の笹原壮介副会長も出席され、さらに友好関係にある山形支部からは渡辺晃副会長が、香港の宮城県人会からは安部隆孝副会長がお祝いに駆けつけるなど、和やかな雰囲気の中で、宮城・香港の交流促進や協会活動の充実などが話題となって大いに盛り上がりました。



祝賀会で挨拶する村井宮城県知事



祝賀会での楽しい歓談のひとつ

女性部会「ウイング」活動始める

当協会には女性部会「ウイング」があります。宮城県内に在住する香港駐在経験者や香港に興味を持つ女性を中心となり、協会内の一部会として本年1月27日に会員数17名で発足し、3月の料理教室開催を皮切りに本格的に活動を開始いたしました。元聘珍樓料理長、衛漢全シェ



記念セミナーで挨拶する佐々木会長

フを講師にお迎えして、「第一回・ウイング香港広東料理教室」として開催、当日は衛シェフの熟練した見事な中華包丁裁き等もご披露していただき、本場香港の広東料理のレシピもご伝授いただきました。日頃料理自慢の女性達も衛シェフの熟練した見事な中華包丁裁きに感嘆の声を上げ、大いに盛り上がりを見せた料理教室となりました。

なお、衛シェフは、香港交易会所中餐、香港聘珍樓を経て1992年来日、横浜中華街聘珍樓本店勤務を皮切りに、吉祥寺店、仙台店などの料理長を歴任、またフジテレビ「料理の鉄人」に出演し陳健一氏と対決した経験など、香港広東料理界において華々しい経歴を持った方です。(※当日のメニュー：滑蛋蝦仁飯(蝦と卵のあんかけご飯)

今後の活動としては、引き続き料理教室を開催するほか、新たに広東語・二胡・香港映画・太極拳等の教室の開催、クリスマスパーティー・春節パーティーの開催等、主に女性の興味に則した文化面の活動を中心に「会員相互の親睦」と「香港の理解と情報の発信」を目的として、活動をより活発化させていきたいと考えております。



女性料理教室が終わって記念写真

ホームページを開設

6月1日からホームページを開設し公開を開始しました。設立の経過、活動報告、入会案内や会員特典など、協会の魅力をわかりやすく掲載しております。宮城県や仙台市へのリンクはもちろん、香港貿易発展局や香港政府観光局のホームページにもリンクできますので、ぜひ一度アクセスしてみてください。

アドレスは次の通りです。 <http://www.m-jhks.gr.jp/>

夙川優の
密着ルポ

「初の表彰台! ドラゴンボートレース・香港カップ」 協会史上最速タイム1分28秒で決勝戦進出し、堂々の3位入賞!

2007年6月3日(日)晴れ、波の高さ0cm、風ほとんど無し、最高の疾走条件となった横浜ドラゴンボートレース香港カップで、NPO法人日本香港協会の擁する「九龍」チームが予選タイム1分28秒で協会史上最速タイムを叩き出し、決勝戦進出、堂々の3位入賞、表彰台の悲願を果たした。

今年第14回を迎えた横浜国際ドラゴンボートレース大会。主催者の一員である日本香港協会はNPO法人化する数年前から一貫して参戦を継続してきた。しかし、決勝進出の経験は一度もない。かねてから、ボートレースの経験者などを募って強化チームの編成に努めてきたが、個々のスキルは高くなるうも、20名がいっせいに漕いで競うドラゴンボートレース

では、高度なチームワークこそが求められる。そして、これまでの協会強化チームは、全国から集う強豪勢に敗北を喫してきたのである。

2007年、日本香港協会は、これまでの旗艦「飛龍」、フォロワー「飲茶」の2チームに加えて「九龍」を新設。参戦可能枠を最大限活用することで、少しでも勝利のチャンスをつかむというのが狙いだ。

レース当日…朝11時半の集合とともに、栗山欣也(香港日本人学校卒業・38歳)キャプテンは、外資系コンサルティング企業で培ったという卓越したブリーフィング(説明)力でチームをまとめ始めた。ばらばらの意識を統一し、自信を植栽する。過去の経験や上級者から盗んだテクニック、パソコンで調べたノウハウの数々を一人一人に伝授して、短時間で「烏合の衆」を「九龍」に仕立て上げていく。

予選の第一走・第二走を経て、チームワークも上々、午後3時半…「九龍」は、優勝候補「CICライジングスター」と対戦することになった。決勝もう一艇はやはり強豪「オイスターズ」である。沸き立つ応援団、決勝特有のもったいぶったスタート合図。「ドン!!」。出だしはよく、中盤にかけてもまずまずの疾走ぶり。しかし後半にさしかかって顔を



午後の部3位入賞の快挙!

上げると、競争相手はかなり前方にいた。ここでペースが乱れはじめる。まさか3レースを漕ぐとは。全員が想定外の中、チームの体力は限界に。もはやこれまでかと、「九龍」はそして、緩やかにゴールしたのだ。

決勝の結果は首位に9秒の大差をつけられたものの、やはり好タイムの1分29秒。誰もが夢見ていた決勝進出、そして表彰台を実現したのが2007年「九龍」である。そんな感無量をよそに、チームはすでに未来を見据えているようだ。キャプテン栗山は「九龍こと香港日本人学校チームは運とチームワークで表彰台にあがることができました。家族や友人の面々も大変喜んでくれました。ここに至るまで様々にサポートをしてくれた日本香港協会役員の面々に心からお礼を言いたいと思います。次回2008年大会では決勝での再戦を果たし、2010年には、優勝候補としての地位を確立するのが、私たち香港日本人学校OB会のヴィジョンです。」と意気込みを語った。

果たして「九龍」は未来を紡ぐダークホース、いや、ドラゴンになるだろうか。

「九龍」クルー：井関、玉川、佐田元、柳、小玉、赤井、錦織、長田、佐藤、坂場、渥美、原田、深野、波多江、島谷、矢板、押田、岸、山村(順不同・敬称略)



決勝で激走する日本香港協会「九龍」艇



3日間で160チームが参戦

ザ・ペニンシュラホテルズからのお知らせ

ザ・ペニンシュラホテルズはフラッグシップであるザ・ペニンシュラ香港はじめニューヨーク、シカゴ、ビバリーヒルズ、バンコク、北京、マニラでホテルを運営しています。さらに2007年9月1日、丸の内にザ・ペニンシュラ東京がいよいよ開業、東京の外資系ホテルでは十数年ぶりとなる、一棟丸ごとホテルという圧倒的な存在感を現します。伝統的なペニンシュラホスピタリティーによって生まれる贅沢な心地よさと共に、東京の新たなランドマークとして根付くことでしょう。



ザ・ペニンシュラ香港とホテル仕様のロールスロイス



[サマースプレnder]

ザ・ペニンシュラ香港でのご滞在をより一層楽しんでいただくための“サマースプレnder”を2007年9月15日までご用意いたしました。ザ・ペニンシュラspa by ESPAでの50分間のボディーマッサージスパトリートメント、レストランでのディナーまたはロールスロイスでの空港送迎の中から好きな特典の一つをお選びいただけるプランです。

- ◆**料金**：グランドデラックスカオルンビュールーム
1室一泊2名様 HK\$ 4,080 (税・サ別)より
(注：2連泊以上でお申し込みください)

ザ・ペニンシュラ香港特別プランのご案内

[ザ・ペニンシュラアカデミー]

ザ・ペニンシュラ香港がお届けする期間限定の新しい癒しの提案“ザ・ペニンシュラアカデミー”は、五感を刺激してお客様を至福へと誘うウェルネスプログラムです。ロールスロイスでの送迎、スパトリートメントやエルメスでのご朝食、昼食、ウェルカムディナー等が含まれ、2泊3日で質の高いヘルシーで優雅なご滞在がお楽しみ頂けます。

- ◆**料金**：お一人様HK\$9,960
(スーペリアスイート1室2名様2泊、税・サ込み)

他のザ・ペニンシュラでも各種特典の付いたお得なプランを実施しております。また香港、ニューヨークそしてバンコクのホテルでは2泊目が無料となる“ザ・スイートライブ”でさらに贅沢なご滞在がお楽しみいただけるプランをご用意いたしました。



ザ・ペニンシュラ東京

ご予約・お問い合わせは、ザ・ペニンシュラホテルズグローバルカスタマーサービスセンターまでご連絡ください。
フリーダイヤル：0120-563-888
E-mail：reservation@peninsula.com
又は peninsula.com まで